

Malice @DOLL

Malice @DOLL

Chapter: 11

Hard Fresh

Version 2.0

原案・脚本／小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

登場人物

マリス Malice@Dollドール

白い少女 Ghost Girl

機械者たち Machineries

ジョー@アドミン Joe@Administrator管理者

デヴォ@ルーコサルト Devvo@Leukocyte.....白血球／異物監視者

メリザ@パイパー Meliza@Piper.....管工事者／笛吹

トッド@リペアラー Tod@Repairer.....修理者／医師

チック@ソルダール Chic@Soder.....半田／電気配線者

フレディ@リッカー Fready@Licker舐める者／清掃者

オペレーター Operator

まともな人間ならば、そこで一晚過ごしたただけで気をおかしくしてしまうに違いない。

『鏡地獄』の主人公が作ったかの如き、レンズと金属のがらくたがそこに積み上げられている。それらは決して死んではない。機械達は生きている。その証である小さな灯が蛍の様にチカチカと瞬いている。天井には無数のダクトが垂れ下がる。

音（ノイズ）――

モゴモゴとした声。食器の鳴る音――、密やかな笑い声。女の切なそうな吐息――。はつきりした言語は聞こえない。そもそも人間のそれかどうかも判らない程、それらが混濁したノイズとなっている。

その暗さ、その湿気による視界の悪さに目が慣れると、そこはそれほど広い部屋では無い事が判る。そして――、その中央には人形が立っていた。

道化のようなメイク、奇矯なコートを着た姿ではあるが、もし、それを作ったのが人間であるのなら、自身の理想の女性像を現出させようとしたに違いない。どんな装いをしていても、それは明瞭に判じられる。マリス。それがその人形（ドール）の名前。

不自然なポーズで、目を閉じ、じっと立っている。その前を、自走型機械が奇怪な手足を蠢かせながら歩いていく。

ノイズ、高まり――

マリスの目が――、開いた。

同時に全てのノイズは、機械達の発するハム音やインジケータの音だけとなって消える。

床を舐めている機械者を見下ろし――

マリス「――おはよう、フレディ」

床を舐めていた機械者、リッカー（舐める者）である彼はマリスに目を向ける。

フレディ「久しぶりに起きたんだね、マリス@ドール」

カクンカクン、と首を動かし——、マリス、軀を動か
かし始める。

マリス「夢を見ていたの」

フレディは再び床を舐める事に関心を戻した。

フレディ「そいつは夢なんかじゃないさ、マリス。それはただの
記憶だ。遠い昔の」

非人間的な、そう、まるでマリオネットの様な所作
で軀の各部をひとしきり動かした後、マリスは歩き
始める。

フレディ「気を悪くしたかい？ マリス」

マリス、振り向き

マリス「そんな事、ない。だって、あたしはドールなんだから」

マリス、部屋を出ていく。

フレディ「——今日も行くんだね、散歩に」

マリス「だって、それがあたしの仕事なんだもの」

フレディ「客なんかどこにもいやしないのにかい？」

マリス「じゃあ、あなたは誰の為に掃除しているの？」

フレディ「それは、俺がリッカーだからさ」

マリス「一緒だね、あたしと」

フレディ「そうだ、一緒だ」

快樂門 Gate of Joy

ドイツ表現主義派映画のその様な、異様なパース
の小さな建物がひしめくブロック。

毒々しい色彩が、経時変化してくすんでいる。

ここに見られる看板には、昭和三十年代を想起さ
せる様な意匠。しかし文字は、我々が知るそれでは
ない。

あちこちに、かつてそこは、快樂的な欲望を刹那
的に満たす場所であった、という痕跡が暗示されて
いる。

そのブロックの中央を抜ける、メイン・ストリート。
そこを、ヒールの音を響かせ、おぼつかない足取り

で歩いてきたマリス——。
ふと立ち止まって見回す。

今は朽ちている街——。

また、あのノイズが小さく聞こえ始めた——。
朽ちた街が——、隆盛していた時の幻像とダブって見える。

雑踏がひしめき、マリスの様なドール達が、肉体労働の為にこの土地へ流れてきた粗野な男達の歓心を買っている。

抱きしめられ嬌声を上げるドール。

往来の真ん中で半裸にしたドールの、硬質な軀を品定めしている者——。

それらはぼんやりとしか見えていない。

それはマリスのメモリの中に僅かに残った記憶の残滓でしかないからだ。

再びノイズは消え、マリスは独りぼっちになった。

マリスの目から、涙が零れた。

マリスの顔には、道化の様なメイクが施されている。そういう趣味の客が多くついたという事だ。

涙の様な意匠の、ただ描かれただけのペイントが、瞳から零れた涙で滲んで、顔を薄汚れさせる。

声 「壊れているな、マリス」

振り向くマリス。表情は無いまま。

ギツ、ギギツ。案山子の様なシルエットの長身の機械射が、矮小化した建物の陰から姿を現す。

マリス「こんにちは、ジョー@アドミン」

ジョー「おかしなところから冷却液が漏れている」

マリス「——あたし、壊れているの？」

ジョー「壊れていない機械者は、この世界にはいない。みなそんなのだ。永遠を生きるには、どこかを直していくものだ。リペアラーに直して貰いなさい。トッドが確か上の階層にいる筈だ」

マリス「——ありがとう」

行こうとするマリスの背に、

ジョー「マリス」

振り向くマリス。

ジョー「上の階層にはルーコサイトがいる」

マリス「ずっと昔に会った事があるわ。あたし達を護ってくれてる、強いマシナリーでしょ」

チック「本来はそれが仕事だった。しかし、デヴオというルーコサイトはその仕事を忘れるという故障をしている。もし見かけたら近づかない事だ」

マリス「判ったわ、管理者のジョー」

エレベーター

単に上下にリフトするのではなく、奇妙な仕掛けで横移動しつつ上の階層へ向かうエレベーター。

その中に立つマリス。

涙を手で拭う。

やや目の下の意匠が薄れた。

ドアが開くと、次の世界が開ける。

ワークエリア Work Area

下層の快樂門とは異質の世界。

共通しているのは、湿気を帯びた空気と薄暗さ。

しかしここには、何らかの秩序がある。天井部には無数のパイプが筋肉組織の様に束なっており、熱帯の植物の様に垂れ下がったりしている。

ドールが普段来る様な場所ではない。

エレベーターを出て歩きだすマリス。

ぶーん、ぶーん……。

抑圧的なハム音が低く響いている。

このマリスの居る世界は、生きている。

しかし、それを機能させているのは全て、マリス達の様な機械者だけである。

長い長い通路を、ヒールの音を響かせ歩くマリス。
と——、突如上からドスのマリスの眼前に何か
落ちた。凄まじい音をたてているにも関わらず、マ
リスは無表情のまま。

マリス「——」

床を見下ろすマリス。

それは——、半壊した機械者。女性的な柔らかいフ
ォルム。口は長い管になっており、苦しげな、フル
ートの様な音をたてている。

マリス「——こんにちは、メリザ」

メリザ@パイパー、管工事者。笛を吹く者。

屈むマリス。

マリス「どうしたの？ あなたも壊れているのね」

メリザは笛の様な音を弱々しくたてるだけ。

マリス「あたしも壊れているみたいなの。一緒にリペアラーに直
して貰う？」

メリザは、小さく吐息の様な笛の音をたてた。

マリス「でも、どうしてそんなに壊れてしまったの？ あなたは
パイパー、パイプ工事をしているのでしょうか？」

マリス、屈み込む。

弱々しく蠢くメリザ。

マリス、そっと顔を笛に近づける。

マリス「（囁き）じつとして。キスをしてあげる」

マリスの硬質の唇が、メリザの長い口へ触れた。

マリス「あたしにはこれしか出来ない……」

暫く、じつとしている二人——。

突如、メリザの笛が警告を発するかの様にけたたま
しく鳴り始めた。

マリス「（小首を傾げ）どうしたの？ 判らないわ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……。

背後を振り向くマリス。

何か巨大な影が、暗闇の奥から近づいて来る。シュ
ウシュウと蒸気を上げつつ、奇怪な肢体を蠢かせつ

つ、マリスの方に近づいて来る。

メリザ、壊れた躰を必死に動かし、壁を伝って天井のパイプの中へ隠れる。

マリス「——ルーコサイト……。異物監視者……」

マリス、後ずさる。

ヒュウウ……。

天井を見上げるマリス。

メリザが手招きするかの様に目を瞬かせていた。

マリス、垂れ下がったパイプの一つに捕まり、躰を揺らして——、一気に天井のパイプ群の中へ飛び込んだ。

眼下を見るマリス。

本来はこの場所を守護する存在であった、力を持つ者が、その機能的な目的を失って同胞を潰して歩く存在となっている。そのデヴォ@ルーコサイトが下を通り過ぎていった——。

マリス、チューブの奥に潜み、ガタガタと震えているメリザを見る。

マリス「もう大丈夫。ルーコサイトは行ったわ……」

小さな安堵の笛の音をたて、メリザ、奥へ消えた。

マリス「——」

メリザ、見上げる。

チューブの上方から、光が漏れていた。

マリス「——」

マリス、光の方に向かってチューブを分けて上り始める。

回廊

床面を開き、上半身を覗かせるマリス。

そこは——、まるで古いヨーロッパのホテルの廊下。黒ずんだ、しかし元の質は良さそうな絨毯が敷かれ、薄暗い廊下をポツリポツリと壁にあるランプが照らしだしている。

ホテルではない様だ。ドアは壁に並んではない。床から抜け出たマリス、スツと立つ。

マリス「——こんなところ——、あたし来た事もない……。ずっと毎日、お散歩をしていたのに……。あたしはこの事を何も知らない——」

歩きだすマリス——。

マリス「！」

誰かが、いる。

廊下が折れたその突き当たり。電灯の間近に、小さな人影がぼうつと立っていた。

マリス「——だ、れ……？」

幼女だ。クラシカルな、しかし華美に過ぎないドレスを着ている。歳は未だ五歳に満たない程。小振りな白いボールを胸に抱えて、俯き加減に立っている。決して透けたりはしていないが、薄くブラーが掛かった様に、実存を確信させない姿。

ゆつくりと近づくマリス。

マリス「——誰なの……？」

マリスの左目——、それには少女の姿が映っている。マリス、小さく「違う」と首を振る。

マリスの右目——。

そのPOV

奇妙なインターフェイスのマリスの視覚認識映像。

そこには、壁は映っているが、少女の姿はない。

見えているものと、見えていないそれとが交錯する。マリス「——こんなの、おかしい……。いないのに、そこにいるだなんて……。あなたはいないのよ。でもいる。そこに見えている——」

幼女——、マリスに目を向け、微笑んだ。

とーん……。スローモーションの様にゆったりとした動きでボールを床につく少女。

マリス「——」

マリスが立っているところからは死角となっている向こうへ転がっていくボール。

それを追って少女、軽やかに駆けだす。

マリス「あっ、待って」

マリス、早足で追おうとするが——、ぎくしゃくとした動き。

マリス「！」

自分の脚を見るマリス。

長いコートの裾から伸びた、PVCのブーツを、赤黒い液体が筋を作って床へ落ちていく。

マリス「な——に……？」

コートの前を開くマリス。

スカートの下から赤黒い液体が垂れていく。

マリス「ここからも——漏れている……」

その先の回廊

ギギ ギギ ギギ

歯車が軋む様な音をたてて、マリスがぎくしゃくと歩く。

マリス「このままではあたしは止まってしまふ。リペアラーを早く探さなきゃ……」

と、立ち止まるマリス。

何かが聞こえる——。

耳を澄ますマリス。

マリス「誰か……、いる……」

小編成の舞曲が奏でる音、談笑する声、床を踏む音、食器が鳴る音——。それぞれは決してはつきりと聞こえない。全てが混濁し、くぐもったノイズとして聞こえる。

マリス、ゆっくりと前方へ。

そこにはドアがあった。

それはまるで、ホテルのボール・ルーム（舞踏室）の様な——

ボール・ルーム

カッーン……。踏み込んだマリスの足音が、磨かれたマホガニーの床を鳴らす。これまでとは違って、開けた空間。しかし、空疎。ドーム状の高い天井。誰もいやしない。誰も踊ってなどいない。マリスは中央を凝視している。

そこにあるのは、直径5メートル程の大きさの塊。複雑なパーツが複雑に組み合わさって構成されたもの。明らかに機械ではあるが、機械者達とは異なる文化のもの。

そして、それは生きている。ボディ各部が動いたり明滅したり、回転したりしている。

マリス、その前に立つ。

マリス「——あなたはリペアラー……？ そうじゃないわね。前に会った時はそんな姿じゃなかったもの。もつとも、あたしのメモリーもおかしくなってしまうているかもしれない」

巨塊、反応しない。

マリス「あなたもマシンナリー？ どんなお仕事をしているの？

あたしはドール……。あたしは——、なぐさめてあげるのがお仕事……。でも、もう慰めてあげる人がいない。

だから、お散歩をしているのよ、毎日——」

マリスの目から、再び黒い液体が零れ落ちた。

マリス「ね、見て。あたし、故障しているみたい。おかしいの。

だから、リペアラーを探していたの——」

マリス、巨塊の前に。

マリス「キスしてあげる。あたしに出来る事はそれだけ。そしてら、一緒にリペアラーを探して——」

ゴンツッ！

巨塊が律動する。

マリス「？」

後退るマリス。

巨塊が悲鳴の様な軋む音をたて――、
ブシュツ！ 貝の様に上部が開いて、内部から眩い
光が漏れだす。

マリス「――どう、したの……？ 何をするの……？」
眩い光を見つめるマリス。

マリス「誰か、その中にいるの……？」

光がやや弱まり――、その内部の物が見え始めた。

マリス「――？」

それは――、巨大な蛇――

マリス「――（小首を傾げる）」

蛇ではない。フレキシブルな間接を無数に持った、
巨大な器官。しかしそのシルエットはまさに蛇。

マリス「それが――あなたの機能……？ 何をするの？」

蛇の頭の先は、鋭いエッジとなっている。その頭部
の脇には無数の細い器官が生え蠢いている。

マリス「――あたしは――、あなたが、嫌い」
ビュツ！

巨大な蛇の頭がマリスに向かって瞬時に伸びた！

マリス「！」

マリス、激しい衝撃に全身が揺れる。

マリス「うぐっ……」

自分の軀を見るマリス。

蛇の頭部が、マリスの腹部に突き刺さっていた。

ガクン、ガクンと頭を揺らすマリス。その目は虚空
を泳ぐ。

蛇の頭の脇の細い無数の器官は、突き刺さったマリ
スの腹部に伸びて――、腹部から夥しい量の赤黒い
循環液が溢れ出ていく。

マリス「――いや……。やめて……。そんな事をし たら――、
あ――たし――、壊れて――もう二度と――」

ガクン、ガクン、律動する蛇の動きに合わせて、マ
リスの全身が揺すられ、マリスの頭部は 人形の首
の様に グラグラと揺れ――、のけぞった拍子に、
自分の立っていた背後を見る。

マリス「——」

逆さに見えるボール・ルームの入り口。

そこには、あの白い少女がぼんやりと立って——、
笑いながらマリスを見つめていた。

マリス「あ……」

再び激しくマリスの腹部を貫く蛇の頭が律動した。
揺すられたマリス——、意識を失っていく。

溶暗。

マリスの部屋

ハッ、と目を開けるマリス。

そこは、いつもマリスが機能休止の為に戻る部屋。
キョトンとした顔で呆然と辺りを見回すマリス。

マリス「ほんとに——、メモリーがおかしくなってる……」

マリス、ゆっくりと全身の力を抜く。

手をそつと腹部に這わす。

服の上からでも、そこに穴が開いていない事が判る。
小さく嘆息するマリス。

不自然なポーズで立っていたのも、自然な立ち姿と
なって——、俯き——、肩が小刻みに揺れている。

マリス「ククツ……。変な夢……。あはは、あはははは」

マリスの声が室内に響く——。

マリス「（愕然）——笑っているわ。マリスが——笑っている」
マリス、見回す。

ビードロなどの硝子細工品が並ぶ辺り。

そこに、くすんだ鏡が斜めに立っていた。

マリス、その前に立って顔を映す。

マリス「——」

マリス、笑顔をつくって見せる。

笑っている。

そつと自分の顔に指を触れさす。

柔らかい触感。

唇に指が移る。

そっと自分の唇の形にそって動かす。

口を開くマリス。

ねっとりとした口腔内には、血が通っている様。

急に恐ろしくなるマリス。

自分の躰を抱く様に、両手で自己の感触を確かめていく。

胸――、腹部――、脚――、全てが柔らかい。

もうギシギシといった音などたてていない。

マリス「――どうして……？ 何が起こったの……？」

快樂門

マリス、軽やかな足取りでやってくる。

いつもの通り、そこは死んだ街のまま。

しかしマリスはいつもとは違っている。

マリス「あははは。ジョー！ ジョーはいない？ 見て、このあ

たしを見て！ 今までと違うの！ 躰がとっても軽くな

って、柔らかくなったの！」

踊る様にはしゃぎつつ走るマリス。

と！ 門の前に大柄な影が立っていた。

ハツとなって立ち止まるマリス。

マリス「――ジョー、見て、このあたしの躰」

ギギ。メカニカルノイズをたてて、ゆっくりとマリ

スの方へ近づく大型機械者。

ジョー「確かに私はこの階層の管理者。ジョーという名前は仲間

だけが勝手にそう呼ぶもの。それをどうして君が知って

いる」

マリス「あたし、マリスよ。覚えていないの？」

ジョー「――マリス……？ ドールのマリス？」

マリス「そう。マリス@ドール」

ジョー「私の認識しているマリスはドールだ。マシナリーであつ

て、それ以外の者ではない。しかし、今私の前に立って

いる君は、我々とは異なる存在だ」

マリス「え……？」

ジョー「機械者ではない、という事だよ」

マリス「（必死に）あたしはドールよ！　あたしはあたし！」

ジョー「君は、ドールではない」

マリス「やめてよ！　何度も会った事があるでしょう？」

ジョー「私が出たのは、ドールのマリス。君は違う」

マリス「そんな事言わないでよ！」

マリスの目から涙が零れる。透明で美しい涙。

嗚咽し、顔を覆うマリス。

ジョー「——そういう反応をする機械者は、いない……」

マリス「（嗚咽）——じゃあ、あたしは何なのよ……」

ジョー「——私のメモリーの、最も深いところに僅かに残っているデータが、そんな存在の事を記憶している」

マリス「え……？」

ジョー「神々の姿だ」

マリス「神……？」

ジョー「私達を創造し、この世界を創造した神達の事だ……」

マリス「——お客様の事……？」

ジョー「ドールにとってはそうだったな。かしづき、ひざまづいて神の生殖を促す欲望を刹那的に慰めるのがドールの仕事」

マリス「——（嫌悪）——やめて……」

ジョー「何を嫌がっている。ドールはそういう存在だったではないか」

マリス「そうだけど……、そういう風に言われたくない……」

ジョー「ドールが、ドールとしてしてきた事を嫌悪するのか。」

やはり君はドールではない」

マリス「やめてよおお！」

駆けだすマリス。

その背に容赦無く——

ジョー「神はもうこの世界にはいない。ドールでも神でもない存在は、この世界の秩序を——」

遠く響くジョーの声。

はあ、はあ、はあ……。

息を切らしている。マリスが苦しいのはしかし、今は躰よりも心――。

マリス「――あたし――何？ 何になってしまったの……？」

マリスの脳裏にフラッシュ。

半裸のマリス。脚を舐める客。

ベッドに寝かされ、天井を見つめるマリス。

ボールギャグを咬まされているマリス――。

いずれのマリスも無表情でいる。

マリス「――あたしは――、ドールだよ……」

そのマリスの背に、ゆっくりと近づく巨大な影――。

マリス「（気づかず）あたしは、あたし……」

ハッ。どおおん！

撥ね飛ばされるマリス。

床に転がり、あまりの激痛に顔を歪める。

マリス「うっ……（見て）ルーコサイト……」

デヴォ「ぐるぐるるるるる」

デヴォ@ルーコサイトが立ちはだかっている。

マリス「あたしはここにいていいのよ！ やめて！ 乱暴しないで！」

で――

デヴォ「ぐるぐるるるるる」

言葉が判らないデヴォ、再びマリスに襲いかかる。

マリス「きゃあああああ！」

背を鋭い爪で切られる。

マリスのコートが破れた。

それを脱ぎ捨て、必死に駆けるマリス。しかし、激

痛が――。

マリス「（泣きながら）痛いよお……。痛いよおおお」

奇怪な肢を交錯させながらマリスに迫っていくルーコサイト。

デヴォ「ぐおおおおおお」

デヴォの鋭い爪が——、マリスの頭部を狙って振り落とされんとした時——！

ジョー「（オフ）デヴォ@ルーコサイト！」

ふっ、と動きを止めるルーコサイト。

マリスは床に転がる。

ぎぎ ぎぎぎ。ジョーが脇より姿を現す。

ジョー「管理者の私の命を忘れ、他者を傷つけるだけの存在。お前は最早ルーコサイトではない。デヴォよ、私のコマンドにより、自己破壊せよ」

マリス「——ジョー……」

デヴォ「ぐるるるる——、ぐおおおお！」

いきなり側部から爪を伸ばし、ジョーの機械の軀を貫くデヴォ！

マリス「きゃああああ！」

ジョー「——コマンドが——」

バチバチと火花を散らし、ジョー、崩れる。

デヴォ「コワシタイ……。オマエノキレイナボデイ」

マリス「い、いやあああ！」

再びマリスに爪を向けてくるデヴォ。

必死に立ち上がって駆けだすマリス！

エレベータ

飛び込むマリス。

マリス「ううっ！（必死にボタンを押す）」

爪が迫るすんで、シャッターが閉じ、上部階層へ。ズルズルとマリス、床に座り込む。

同/外観

エレベータが登っていく。

ワーク・エリア

ドアが開き、マリス、ヨロヨロと出てくる。

と！ 背後で凄まじい音。

振り向くマリス、愕然。

ベキベキベキ！ エレベータの函が凄まじい力で潰され——、下へ落ちる。

そして代わりにその姿を見せるデヴオ！

マリス「ひっ、ひいひい！」

回廊の廊下を走るマリス。

背後から迫るデヴオ。その距離は徐々に縮まってく——。

マリス「いやだ——、死にたく、ない……」

マリス、脇の細い通路に折れて走る。

と——、笛の音が微かに聞こえた。

マリス「！」

見上げるマリス。

天井を這うパイプ群の中に光点。

マリス「——メリザ♡メリザ@パイパー♡」

追ってきたデヴオ、マリスが曲がった細い通路に入ろうとして、小首を傾げる。

マリスの姿が、無い。

天井部のパイプ群の中で、じっと身を潜めているマリス。そのすぐ脇には、壊れかけたメリザがいた。

マリス「脅えないで……。あたしよ、マリスよ」

そつと指を伸ばすマリス。

しかしメリザは目を明滅させ、警戒してサツと身を引き、小さな笛の音をたてる。
ベキッ。

ハッとなつて下を見るマリス。

デヴオが無理矢理に細い通路に入り込んできたのだ。メリザ、恐怖の声を笛の音で現す。

マリス「——どうしてあんなにしつこいの……？ あたしが異物だから……？」

メリザ「……」

マリスの躰、小刻みに震えだす。

マリス「——あたし、怖い……。もう、駄目なのかな、あたし」
マリスの瞳から、涙がひとしずく……。

それが、デヴォの頭部（というものがあるのかは不明だが）に垂れた。

デヴォ「ぐるる……」

見上げるデヴォ——。

目を閉じているマリス——。

ガキ！ その音に目を開けるマリス。

メリザの躰が真つ二つに割れていた。

マリス「メリザ！」

光を失いつつあるメリザの目——。

ひゅうつう……。寂しい音を立てる、笛の口。

マリス、そっとその口に唇を寄せる。

マリス「ごめん。ごめんね、メリザ……」

マリス、キスをする。

と——、マリスのキスはほの赤い光となって——

メリザと、メリザを包むパイプ群に広がっていく。

マリス「え……？」

形容しがたい音をたて、マリスの周囲のパイプ群が律動を始める。

それは、まさに有機物器官。

メリザはその一部に取り込まれ——、否、メリザはその有機物の頭部となって——

デヴォ「くわあ？」

何が上部で起こっているのか判らずにいたデヴォ、

自己に迫る危機に気づき——

デヴォ「くわあー！」

メリザとパイプ群が融合した、腔腸動物の様な存在がデヴォに襲いかかった！
デヴォ、必死に抵抗。凄まじい速度で腕を回転。有機体となったパイプを叩き斬り——

垂れ下がった、有機物とはならなかったパイプを伝って降りるマリス。眼前の光景に愕然。

マリス「やめ——、やめて！ メリザに」

組み合う怪物と怪物。

デヴォの躰から火花が激しく迸り——炎上する。

ピイイイイイ！

メリザの躰が溶けていく。

マリス「やめてええええええええ！」

To Be Continued...